

阿部昭  
18の短篇

阿部昭  
18の短篇

福武書店



© Akira Abe.  
Printed in Japan,  
1987

阿部昭18の短篇

昭和六十二年四月十日第一刷発行  
昭和六十二年六月五日第三刷発行

著者 阿部 昭

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社福武書店

東京都千代田区九段南二丁目二八

郵便番号 一〇二一

電話 東京 (〇三)二三〇一二三三

振替 東京六一〇五〇九七

印刷 大日本印刷株式会社

平版 株式会社栗田印刷

製本 加藤製本株式会社

定価 九八〇円

乱丁・落丁本は、送料小社負担にてお取替いたします。  
ISBN4-8288-2224-0 C0093 NDC914 210 200P

目次

|         |    |        |     |
|---------|----|--------|-----|
| あこがれ    | 5  | 海の子    | 123 |
| 明治四十二年夏 | 17 | 家族の一員  | 136 |
| 桃       | 27 | 怪異の正体  | 143 |
| 子供の墓    | 39 | 三月の風   | 156 |
| 自転車     | 50 | みぞれふる空 | 163 |
| 猫       | 59 | 小動物の運命 | 173 |
| 言葉      | 70 | 水にうつる雲 | 182 |
| 手紙      | 76 | あとがき   | 195 |
| 人生の一日   | 85 | 執筆年月   | 196 |
| 天使が見たもの | 97 |        |     |

装  
丁  
小  
山  
晃  
一

阿部昭18の短篇



## あこがれ

春がきた。

ところが少年はねむいどころではなかった。朝も起こされなくてもちゃんと目をさます。とびおきて蒲団をまくりあげ、前の晩から寝押ししておいたズボンをはいて、すぐ洗面所へ行く。

父の櫛を水でぬらして、鏡の前で寝ぐせのついた髪をとかす。それから、父がひげを剃ったあとに使うアメリカ製の白い粉を必要もないのに顔に塗ってみる。中学生の顔洗いはずいぶん長くかかる。彼は歯が乱ぐい、歯なのと、いくらみがいでも白くならないことであいらいらして、それでいつも時間をむだにしてしまうのである。

彼がめかしているあいだ、癩癩もちの小さな男の子がいる隣りの家ではきょうも朝早くからおもちゃのピアノの音がしていた。誰も弾いていないのに鳴っているというふうに、ガラスの楽器のような澄んだ音がする。

水をつかいながら、少年はいけないことだと感じなが

らもつい隣りの家のほうをのぞいて見るのだった。青いこまかい葉をいちめんにつけた藤棚のむこうは繁みの蔭で暗いほどだった。その暗い部屋からピアノの音はしていた。

春がきたのだ、と少年は思った。春がきたことがこんなにうれしいことはいままでになかった！

彼はもう一度、鏡の中を見た。鏡にうつっている少年はわざとのように浮かない顔をしていた。その顔はこういつているようでもあった——僕にはほんとうのところよくわからない。彼女が好きなかどうか、これが好きだということなのかどうか。わかっているのは、彼女のことを考えはじめるともう何にも手がつかないということだ。

少年はその顔で食堂へ行った。父はもう出かけたあとだった。

母と二人でする食事のさいちゆう、彼は何度も子供部屋こどもむらの柱時計に目をやった。

彼は食べたくない。それでもなんとか食べようとするのは母にあやしまれないようにするためである。

母はたえず少年を観察している。

「あんたが勝手に起きてくれるから、おかあさん、とて



も助かる。」

「朝みんなとソフトボールをやるから。」

彼は口をうごかしながらいう。

「だから、早く行って場所をとらなきゃならないから。」

少年は母にうちの時計は正確かどうかときいた。母は狂っていても一、二分だといった。でもその一、二分が彼には問題だった。少年は毎朝「白百合」の生徒たちが乗る江の島行き電車に合わせて家を出るのである。彼女はその十分前に玄関を出てくる。

おたがいの家は五十メートルと離れていないのにうまく出会うことはとても少なかった。少年は歩きながらしよちゅう道の前とうしろに気をくばり、わざとのろろ歩いたり急に思いなおして早足になったりした。そして駅へ着いてからほんの一、二分のあいだ、向かい側のホームに彼女が鞆をさげて一人でぼんやり立っているのや同級生とおしゃべりしているのを、あまり見すぎないように意識して見るのであった。

その朝、彼女がちょうど門から出てきたところへ少年が行った。少年の心はおどった。まだ二十メートルもはなれていた。その二十メートルを彼はうつむいて歩いた。

彼女は門のそばの石垣にもたれるようにしていた。

——頭をかしげて、年上らしい落ちついた目をして。

「おはよう。」

彼女のほうから大きな声でいった。

少年はもっと近づいてから、それも小さな声でしかいえなかった。彼は何かいわれてもただおどおどするだけだった。そしてひどく急ぎ足になった。

彼女は小走りしながら腕時計を見た。

「何分の電車に乗るの？ おくれそう？」

「さあ、どうかな。」

彼は逃げるようにして、わき目もふらずにとつと歩いた。

「じゃあ走れば。いっしょに走ってあげる。」

そこで彼は走りだした。これはおかしなことになったと思ひながら。

彼女も走ったけれど、たちまち少年にひきはなされた。彼はかまわず走りつづけた。走りながらやっぱりどうしても彼女が好きなのがわかった。好きだ。彼はうしろも見ずに走った。

彼女は途中でのびてしまっていた。少年がふりかえると、手で小さなバイバイをして先に行けといった。

「おくれるといけないわ。」

で、彼はまた走らなければならなかった。

夕方学校から帰ってくると、少年はまっさきに通りに出て、斜むかしの家の勝手口から目をはなさないようにした。雨さえ降らなければ彼の見張りは毎日かかさず同じ時刻におこなわれた。その時間になると彼女がちいさな弟たちを夕飯に呼びに出てくるからである。

彼女のすがたが見えると少年はもうじつとしていられないので、彼が相手にするには幼すぎるような子供たちと遊戯に熱中するふりをした。そのあいだも頭はひとつのことといっぱいだった。——自分の気持を相手に知らせる決心がつくかしら。でもどうやって？ それを考えると彼の心は早くもしぼんでしまうのだった。

その晩も彼女は少年の家の前まで来ていた。すこしはなれると顔はもうよく見えなかった。彼女は何度も弟たちの名前を呼んだ。

彼は小さな男の子たちを相手にますますはしゃぎながら、夕闇をすかしてたえず彼女の姿をさがした。

彼女は待ちくたびれたように門柱にもたれて、生垣のあすなろうの葉を一枚ずつ摘みはじめた。小さくたん

だハンカチを片手に握りしめて、ほそい指で葉をむしつては鱗のようにばらばらにした。そしてそれをまたもと通りにくつつけようとするのだけれど、暗いので、ひどい近眼の人みたいに顔を葉に近づけるのだ。するとまろい癖のついた柔らかなそうな髪のおふさが頬にかかるので、そのたびに彼女の白い手がうごいて髪を耳のうしろへ持つて行くのが見えた。

海の上の空はすっかり暗くなっていった。それでもまだ小さな子供たちが息をきらして通りを走りまわったり、しきりにおたがいの名前を呼び合ったりしていた。

少年は何か話しかけなくては、と思った。だけど話すこともとっさには浮かんでこなかった。彼は大した考えもなしに先週から藤沢の映画館でやっているアメリカの動物映画の題名をいった。

「あの映画、二回も見ちゃった。」

「そうなの。」

彼女はとても驚いたというように彼の顔をのぞきこんだ。

「映画はあまり見ないわ。眼鏡をかけなきゃならないから。」

そして首をすくめて笑った。

それから彼女は少年の知らない宝塚か何かのスタアのことを女の子どうしでするようにあだ名で呼んで、

「むかし、あのひとに夢中だったけれど、いまはそれほどでもないわ。」

といった。

「そう。」

少年はいいづちをひとつ打つのもおかしくらい力んでしまうので、相手が笑い出しはしないかと思った。

彼女は彼に学校がおもしろいかときいた。彼はどっちともうまく答えられなかった。

「高校へ行くと選択科目っていうのがあるのよ。私はいま数学と手芸をとってるの。でも勉強は好きじゃないから大学まで行くかどうかわからないわ。」

少年はそんな先のことまで考えたことはなかった。彼は黙っていた。

「うちは父がいないから。」

そういって彼女は口をつぐんだ。

彼女の父が東京でずっと会社員をしていたこと、それから兵隊にとられて南方で戦病死したことをいつか彼の母が話していた。彼は何かいおうとして言葉をさがした。

けれども彼女は一瞬後にはまた明るい顔つきになっていた。

「でもよかったわ。あなたのお父さまは元気で帰っていらして。そのときはうれしかったでしょう。」

少年は苦笑してみせた。そしてわざとどうでもいいやという調子で答えた。

「でもおやじはね、生きて帰ってくるんじゃないかって、そういってるよ。」

「だってそんなことはないわ。嘘よ、そんなの。」

そのとき通りのむこうの端で誰かが外灯をつけた。子供たちは一人のこら姿を消していた。

「嘘よ、そんなの。」

彼女はもう一度そういってじっと彼の目を見つめた。

外灯の光で今度ははつきり顔が見えた。

彼女が行ってしまったから少年はいつまでもその場にぐずぐずしていた。自分がいった言葉のもの欲しさに気づいて、後悔にくるしみながらじっと外灯のあかりに目をこらした。

しかし父が帰ってきたことがいまでもそんなにうれしかかというと、それは少年にもうまくいえないのであつ

た。

「おれはなにも帰ってきたくて帰ったのじゃありやせん。」

少年の父はよく母と衝突してそういう。そんなとき彼はほとんど母を憎みそうになる。

彼の父はしばらく前から横浜のある銀行に雇ってもらって日掛け貯金の集金人をしていた。父はもう老人であった。一日歩きつづけるとあくる朝なかなか起きあがれなかった。そして疲れているのでますますものをいわなくなっていた。——こういうことはみんな父の言葉が嘘ではないからだと少年は思うのである。

父は小さいときから少年のあこがれだった。その父が負けて帰ってくるとは思わなかったのだ。負けることが軍人の子にとつてどういふことであるか、彼は考えたこともなかったのである。

日本の兵隊は貨車につめこまれて帰ってきた。貨車の外にもぶらさがっていた。鉄の扉のかげから鼠のように顔だけ出している兵隊もいた。それでもあふれた組は機関車の排障器や連結台にのつていた。駅には陽気なアメリカ兵がいっぱいいいて、きたない貨車が着くたびに口笛を吹いたりヤジったりした。少年は学校の行き帰りに踏

切りや焼けぼっくりの柵のあいだから手をふった。けれども日本の兵隊はめつたに手をふらなかつた——出征のときあんなに手をふつた彼らが。くる日もくる日も貨車は通つた。そしてまもなく少年の父も帰ってきた。何年も彼が写真だけで見慣れていた父と別人のようになつて。

夕飯のあと、少年は一人で食堂にいた。父が帰つてこないうちにさつきと自分の部屋へ引き揚げたものかどうか迷つていた。母が食事のときのつづきで台所へ行つてもからもまだ彼のことであらたらとぐちをこぼしていたから。

少年は流しの水の音と母のぐちとが交互に聞こえてくるのを耳で楽しんでいたのだ。ひとつだけ母がいまにもいい出しそうでいわないことがある。それを早くいったらどうだ——そんな臆病な期待から彼はそこにねばつていたのである。

やつと話がそこへまわつてきた。

「……とにかくあの娘むすめとつきあうのは、おかあさんは反対。そのせいじゃないの、このごろ急にそわそわして家に居つかなくなつたのは。」

そして水道の蛇口をきゅつとひねった、自分の口をひねるみたいに。

「ちがうよ。」

少年は水道のうるなる音に消されまいとして、仕切りのガラス戸ごしにばかに大きな声を出したものだ。

母は最後に蛇口の栓をしめて、洗ったふきんをひろげて掛けるくらいの間をおいてから、彼に負けない大きな声でいってよこした。

「そうですよ。」

少年は苦笑した。そしてなんだかつらくなって、そつと席を立った。

春休みもおわってまた学校がはじまった。

一日のあとにくる夕暮れの時間は長くなった。子供たちはあいかわらず暗くなるまで通りで遊んでいた。けれども少年はめつたに彼女を見かけなかった。新学期になつてから彼女の生活が変つたらしいことに彼は気がついた。

少年はすっかり夜になつてから斜<sup>す</sup>むかいの家の前を垣根に沿って行つたり来たりした。ときどき立ちどまつて、こわれた竹垣のすきまから中をのぞいてみた。――

庭の中ではまだ彼女の小さな弟たちが歯をくいしばって格闘したり怒鳴り合つたりしていた。やがてそれもやむと母親が、「またバケツをこんなに泥だらけにして。」とひとりごとをいいながら暗い庭をひとまわりして縁側からあがり、雨戸を引いた。そして家も庭も闇につつまれた。

少年は家の中で彼女の声がするような気がしていつまでも耳をそばだてた。

そういう日はずつとつづいた。そして、六月の雨のふる日曜日、少年が玄関のポーチに出てぼんやり立っていると、目のまえを彼女が赤い傘をさして通りかかった。

彼女は彼がいるのを見つけて門の外から声をかけた。

彼は、どうしよう、と思った。

彼女は傘をたたんでポーチに駆けこんできた。首すじを雨にたたかれて明るい悲鳴をあげながら。

そのとき彼は何を話したろう。たくさんのことをいおうとしてけっきょく何もいえなかつたような気がする。ポーチには彼女が髪につけている香水のかおりが満ちた。その大人びた薫りが少年を酔わしてしまったのである。

彼女は立ち話のあいだ、腕をのばして扉から落ちる雨

の雫を手のひらに受けていた。雨滴はときどき中心をそ  
れて、時計をはめた彼女の白い手くびにあたってはねた。

と、そのとき、少年の父が植込みのすぐむこうの便所  
にはいった。鉄格子のはまった横の窓がほそくあけてあ  
ったので、父が前を向いて立っているのが見えた。

少年は目をそらした。

彼女は彼の顔色に気づいてちらっと窓のほうへ視線を  
やった。そしてまた話をつづけた。ところが少年の父は  
猛烈な咳ばらいさえたのだ。

父は帰りがけに、窓ごしに何ごとか早口でいった。乱  
暴な口調であった。

少年には聞きとれなかったけれど、彼女は顔色を変え  
ていた。

「しかられるわ。」

「いいんだよ。構わないよ。」

彼は動揺して反抗的にいった。

「でもあなたに悪いわ。」

彼女があわてて傘もささずに庭から出て行ったあと、  
少年はしばらくそこに立って、彼女がしていたように手  
のひらで雨水をうけた。だが雨滴はぶるぶる震える彼の  
手からそれでシャツの袖口に飛び散った。

ポーチには彼女がのこしたあまい匂いがなかなか消え  
ずにいた。

彼は家の中へはいった。

母が待ちかまえているのがわかった。

「さっきのはあの娘こでしょう。またつきあってるの。」

母は父にも訴えたいような顔をした。

「しばらく遠ざかっているようだと思ったら、またはじ  
まった。」

父はうるさそうに答えた。

「かまわんじゃないか、話ぐらいしたって。」

そして少年にはこういった。

「話がしたいんだったらちゃん自分の部屋へあげて話  
しなさい。あんなところで立ち話すもんじゃない。」

それで少年はさっき父が便所の窓から何かいったのは  
そのことだったのだと思ひあつた。

だが、おそすぎた！ 彼はその日を最後に二度と彼女  
に会うことがなかったし、彼女の誤解をとくこともでき  
なかったのだから。

夏休みになった。

少年は彼女が東京の学校へ転校したことを知った。疎

開ってきていた一家はまた東京へ引き揚げるので、彼女だけがひとあし先に移って行ったのである。斜むかいの家ではぼつぼつ家をたためるようになっていた。

夏はさかりだった。毎朝はやくから海水浴場のざわめきが風になつて流れてきた。それは日によって遠くにも近くにもきこえた。少年は一人で音のするほうへ行つた。脱いだものを砂浜に置いて水にはいり、あがるとまたそこへ行つて熱い砂の上に寝た。彼は黒くやけて元氣そうになつた。母はそれをよろこんでいた。

夜、いまは自分の勉強部屋になつてゐる応接間にあかりを消して一人でいるとき、少年は彼女がたずねてきてゐる場面を目にえがいて、出窓に腰かけてゐる彼女と何時間でも話をした。彼がみつめると彼女ははずかしそくに顔を伏せた。すると彼女のまるい癖のついた柔らかなうな髪はふさはこのときもその頬にかかつた。二人が黙つて向かい合つてゐるあいだ、海にむかつて開いた窓にはおしよせる潮の音がたえずした。

そして暗がりを見つめてゐることに飽きると少年は戸棚をあけてなにか読むものをさがした。彼は教科書以外の本といつては父が売りのこしたもののほかは持つていなかった。

古本屋が手もふれずに置いて行つたのは、『地中海に於ける潜水艦作戦』とか『ジュトランド沖海戦』とかいう昔の戦争の本ばかりであつた。少年の父はいまでも気がむいたときにはそういう本を時間をかけて読むのである。

彼はその中の一冊をでたらめにあけてよんだ——  
『大日本帝國は永遠の昔から悠遠の未來に互つて海洋國家であり、我等は永遠に海洋民族、海洋國民たるの運命に置かれてゐる。……』

また別のページをひらくと、舞臺力ⅡⅩⅩ という関係式がのつていた。

かびくさい戸棚のすみには王羲之という人のかいた習字の手本みたいなものも何冊かあつたけれど、これは黄色くなつてぼろぼろに虫が食つていた。

ある晩、少年がいつものように戸棚の中へ頭をつっこんでみると、表紙のこわれたほこりだらけの本が出てきた。『にんじん』という本であつた。彼はなんとなく挿絵をながめた。にんじんは頭に毛がなかった。その絵から少年はずつと昔のことを思い出したのである。

その本は彼がまだ学校へもあがらないじぶん、父がいつか読めるようになったら読むといつて彼にくれ

たものであった。だから父はそれだけは売らないでおい  
たのだ。

少年はぼんやりと思いついた。——にんじんが、夜、  
鶏小舎の戸を閉めにやらされる話を父にしてもらつて子  
供の彼はどんなにおびえたか。そして、にんじんが鷓鴣  
を締め殺す場面で彼はすっかり気分が悪くなったのだつ  
た。鳥の頭蓋骨が碎けて血と脳味噌がテーブルの上になら  
れたというので。……

「子供が読む本!……」

少年は今度もまたその本を戸棚の奥へ投げこんだ。

長い夏休みも終りに近づいていた。

ある日の夕方、少年は斜むかいの家の小さな男の子を  
つれて海を見に行った。彼女の一番下の弟は色の白いお  
となしい小学生であった。

弟はひどく元気がなかった。それで彼はしきりに弟を  
笑わせるようなことをいった。

二人が海岸に出てみると、砂浜の入口に一台のジープ  
がとめてあった。水ぎわまで乗り入れようとしてさんざ  
んタイヤを空まわりさせた跡があった。むこうを見ると  
三人のアメリカ兵が夕日をあびて水にはいつていた。

海はもう秋の色をしていた。白いほそい波がさかんに  
走って消えた。

三人の裸の男は、浅いところで子供のようにならで水  
をはねかえし合っていた。

ふたりはすこし砂の上を歩いて、見晴らしのいい砂山  
に腰をおろした。

少年は沖のほうを見ながらいった。

「きみんとこの姉さん、このごろどうしている? ちっ  
とも見えないけど。」

「お姉ちゃんはおじいちゃんのところにいるよ。」

彼女の弟は手や足で砂をいたずらしながら返事をし  
た。

「帰ってこないの?」

「さあ。帰ってこないみたい。学校をかわったから。」

「おかあさんやきみたちはずっとこっちにいるの?」

「あたらしい家がみつかったら、ぼくも東京へ行くの。」

弟はちよつとうれしそうにした。

「そう。じゃあ、もうじき、きみともお別れだね。」

「そうだね。」

弟は一人前の口をきいた。

少年は話すのをやめて、三人のアメリカ兵がすること



をぼんやり見ていた。三人とも長いこと水の中にいた。それからぶるぶる震えながら陸にあがって、夕日の赤い光のなかで金色のうぶ毛の生えたからだをせわしく拭くやら乾かすやらした。めいめい漁船の蔭で濡れたパンツをぬぎ、じかにズボンをはいて、パンツから海水をしぼった。

砂まじりの風はたえず少年たちにも吹きつけた。

三人のアメリカ兵は漁船の舷にもたれて、火を貸し合つてタバコをふかした。

少年は彼女の弟と別れて家へ帰った。自分の家へ帰ってきたような気がしなかった。食卓についてからもまだ薄暗い砂山の上に白い顔をした男の子と坐っているような気がした。

「お父さんのぶどう酒をあげようか。」

少年の母は思いついたように、彼の前に脚のついたグラスを置き、赤い液体を満たした。

彼はちよっぴりなめて、やめた。

彼はぶどう酒の壺をながめ、そのレットルの絵を眺めた。そこでは帽子をかぶった青年と、やはり帽子をかぶってエブロンをした少女が葡萄棚の下で乾杯していた。

ちようどそのころ、少年の家ではまた父と母のあいだに気まずい空気が流れはじめたのであった。少年の父は半年前にやつとありついた集金の仕事を自分からやめるといい出したのだ。

少年は黙って二人の間答をきいていた。

「あんな不愉快なところにはおれん。」

父はまたいつかみたいに誰か上の人とけんかをしてきたのだ。

母がぐちをこぼしはじめた――

「おれんて、明日からどないするんです。まったく、うちのお父さんという人はどこへ行っても半年とつづいたことがない。いまどきどこであなたのような軍人を使うてくれます。」

母はとにかくもうしばらく辛抱してみたらどうかと父にすすめた。すると父はさばさばしたようにいった。

「辞表をたたきつけてきた。」

「いつですの。」

母は驚いたりあきれたりした。そして笑いながら怒り出した。少年の父は十日も前に勤めをやめてしまっていたのだ。だのにそれを母に打ち明けられなくて毎朝黙って弁当をもって勤めに出ているふりをしていたのであ